

## NITS カフェ 省察を深める対話型授業検討会

8月21日(火)宇大教職大学院主催で「NITS カフェ in宇都宮 省察を深める対話型授業検討会」を開催しました。東京学芸大学教職大学院の渡辺貴裕准教授による、講演とワークショップが一体になった進行で、「対話」「省察」「授業を見ること」について深く学び、語り合いました。——深い省察は「ダブルループ学習」すなわち「もともと持っている枠組み自体を問い直す振り返り」の時に「ハッとする体験」として起こる。——授業者と参観者が対立するのではなく「並び立つように」授業研究をする。——など、従来の授業検討会にありがちな問題点と、それを超えて深める視点について体験的に学びました。

### ◆NITS カフェ とは？

NITSとは筑波にある独立行政法人教職員支援機構（前の教員研修センター）の略称です。教職員の養成・採用・研修を一体的に向上させるために、大学・教委の連携にさまざまな支援をしています。特に全国の教職大学院と協定を結び、教職大学院が大学と行政の協働をリードするよう支援してくれています。

NITS カフェはこの機構の事業で、教員養成大学・教育委員会などの専門の教育関係者と、一般の現職教員、学校、地域、民間企業等が、教員の資質向上に関するテーマで語り合う参加型ワークショップを支援するものです。

宇大教職大学院はこれに応募して採択され、8月21日に実施しました。教職大学院の教員・院生、修了生、教育委員会や教育センターの職員、県内の教職員など、計64名の参加を得て行いました。



### ◆「省察を深める」とは？

講師の渡辺貴裕氏は東京学芸大学教職大学院准教授で、カリキュラムデザイン・授業演習等を担当しておられます。

講演は、初めからさまざまな立場の人が集まるように仕組まれたグループの形態で行われ、説明と演習が良いテンポで交替していきました。

「振り返ることはなぜ必要なのか？」「振り返ることが楽しいときはどんな時か？」と、次々と繰り返される問い。グループの話し合いを経た先に、「これまでの枠組みを超える視点を獲得したとき、ハッとする体験として起こるダブルループ学習的な省察になっている」ことの確認がなされました。

「授業検討会はそうなのだろうか？」「そのように変えるためには何が必要だろうか？」と話は進みます。「子どものことが出てくることは重要だが、子どものことが語られれば、それでうまくいくだろうか？」

### ◆「対話型授業検討会」

渡辺さんは、まだ教師になる前の学卒院生の授業を担当しており、彼らが実習校で実施する多くの授業を「模擬授業」として教職大学院の演習の中で検討させています。

養成段階の模擬授業は、これまで評価項目が予め決まっており、それに従って生徒役の学生が評価をします。担当教授もそれに従って評価やアドバイスをします。ここには従来の学校現場での授業検討会と同じ問題点が凝縮されていると渡辺さんは言います。

授業者と参観者が対立的でなくフラットな関係になって語り合うようにすれば、ハッとするような体験を共有できる「対話型授業検討会」になっていく。このことを渡辺さんは、同じく教育実習中の学生の授業研究から出発したコルトハーヘンの理論を援用して語ってくれました。

### ◆「本質的な諸相への気づき」

コルトハーヘンはALACTモデルという図式で、教師の省察の深まりと実践の改善を説明しています。行為の省察からすぐ改善案が生まれるのではなく、省察の上に「本質的な諸相への気づき」があってはじめて、意義ある改善案が生まれると言っています。自分の実践を枠づけている意識的・無意識的なものの見方や思い込みを、さらに高い位置からメタ認知して解釈し相対化するという作業が教師の成長にとって重要だということです。

模擬授業あるいは校内研究授業という場を共有する仲間が協働的な問題解決を目指すとき、本質的な諸相への気づきが起きそれが共有され、仲間全体が高められていきます。

講演は、本県出身の東京学芸大学教職大学院生の話も交えて進み、あっという間に2時間半が過ぎました。

### ◆受講者の感想から

・理論と演習を組み合わせた内容だったので、自分の中にスッと入ってきました。授業研究会や検討会の「当たり前」を問い直すということが印象に残りました。これは、他のことでも生かせることだとも感じました。自分の考え方の枠やくせにとらわれず、様々な視点で考え、子供たちのための授業について、語り合っていきたいと思います。

・自分が教職大学院在学中に実践した本校での校内授業研究会に理論付けしていただいたようで、自身の取組に対する自信がもてました。

(文責:松本 敏)

## 「ミドルリーダーとして」 教育実践高度化専攻特任准教授 石嶋 和夫

平成21年度から30年度までの10年間の栃木県新規採用教員選考試験の合格者数は、教諭と養護教諭を合わせて公立小・中学校では3,486人、県立学校(県立高等学校及び特別支援学校)は943人でした。また、平成30年度学校基本調査報告書によれば、本県の国・公立の小・中・義務教育学校の教員数は11,064人、県立学校は4,168人です。ここ10年間で、小・中・義務教育学校では約32%、県立学校では約23%が新旧交代していると考えられます。このことから、教員経験が10年過ぎた教員は、「ミドルリーダーとして」の自覚と責任をもって積極的に後輩の先生方への支援に努めなければ、学校が組織として効果的に機能しなくなるおそれがあります。

そこで、佐々木常夫氏の随想「上司力～部下をどう育てるか～」『時報 市町村教委』(H29・1月)から、参考にしたい言葉を抜粋しました。※「部下」を「後輩」と置き換えて読み取ってください。

- 優れたリーダーは事業を残すが、真のリーダーは人を残す。 ○部下(後輩)の教育とは、部下(後輩)の成長を願うこと
- 良い習慣は、才能を超える。
  - ①良い習慣の中で最も大事なことは、人としてあるべき原理原則を行うこと  
(挨拶をする。時間を守る。相手を思いやる。御礼を言う。間違ったら謝る。)
  - ②戦略的に計画を立て、優先すべき業務は何かを正しく選択すること
- 重要な仕事は、終わってから、その結果をフォローアップし、次のレベルにつなげること  
「振り返り内省することで、経験を識見に変えていく。」

以上です。そのためには、後輩の先生方を「認めて、褒めて、励まして、信じて、待って、見届ける。」ことが大切だと思います。

## 《シリーズ:院生の声 ⑤》

### 学びの共有で得た絆

### 学 び

教職大学院棟に、大小二つの院生控室があります。小さい方が2年生の控室で、少し長めの机を二人ずつで使っており、16人の距離が近い状況です。今は、この距離感に安心を感じます。パーソナルスペースは、心の距離。この1年半で培った学びの共有が「絆」に変わり、今の居心地の良い空間を作っているのだと感じています。

振り返ると、授業は対話中心で、毎日が新たな学びの連続でした。最初はややぎこちなかった対話も、1年前期の終わりには時間が足りないほどでした。授業が終わってから院生室に戻って続きを話すこともありました。他校種、学部卒と年齢も経験も違う院生仲間との対話は、思い込みや先入観を立ち止まって改めて考える「当たり前を問い直す」時間でした。相手の意見を聞き自分の意見を語る言葉のキャッチボールを通して、価値観の広がりや学びを共有し、同僚性が培われていったのだと思います。

残すところ、後期のみになった学生生活。実習先の先生方や子ども達、大学の先生方、院生仲間、研修先で出会った方々とのご縁を大切に、対話のキャッチボールを楽しみながら「絆」を深めていきたいです。

(2年 成田芳子)



【2年控室】



【1年控室】

前期の授業「言語活動を軸にした教育内容・方法論」(青柳宏先生)の最終回で、「院生による言語活動」として話題提供をさせていただきました。『君たちはどう生きるか』(吉野源三郎, 1937)の一部を読み、「人の生きる目的は何か」をテーマに、受講者、青柳先生と自由に語りあうというものです。拙文ですが、対話を終えての感想を引用します。

生きることにゴールはない——本当はそんな答えなど欲しくなかった。私は、一生懸命生きた人生に与えられる「ご褒美」が何であるか、その中身を初めから知っておきたかったのです。それを知っていることを「お守り」にしていれば、どんな苦しみや悲しみも、希望とともに乗り越えられると思っていた。しかし、「ご褒美」を初めから皆が知っていては、それは「ご褒美」ではないのでしょうか。やはり「おじさん」の言ったように、「赤色は自分の目で見ないと分からない」が本当なのだと思います。

生きることは「宝探し」、まだ誰も見つけていない「宝」を見つけることなのでしょうか。いや、最初から「宝」なんてなくて、自分で、自分だけの「宝」を創っていく「宝づくり」と言う方がよいかもしれません。「宝」は一つとは限りませんし、これまで創った「宝」をもとに、新しい「宝」を創ることもあるでしょう。人生で直面するどんな経験も、そこでのどんな感情も、すべて大事な「宝のたね」になると思います。喜びも、悲しみも、苦しみも、怒りも、愛も、嫉妬も…。すべてをありのままに受け入れることは、とても簡単なことではないと分かっています。しかし、自分を見つめ、一步一步歩いていく他に、自分だけの「宝」を創る道はないとも思います。(一部抜粋)

教職大学院には、どのような話題であっても、真剣に考え、語り、耳を傾けあえる仲間がいます。ここでの素晴らしい出会いに感謝しながら、貴重な学びを、来年度から始まる教師生活の糧にしていきたいと思います。

(2年 高橋真実)

《編集・発行》宇都宮大学大学院 教育学研究科 教育実践高度化専攻 (教職大学院)

〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350番地 Tel: 028-649-5242

<http://www.edu.utsunomiya-u.ac.jp/koudoka/index.html>

◇教職大学院Facebook : <https://www.facebook.com/uuptnet> ※院生が編集し、教員が管理しているFacebookです。

